

(第11回) 自然観察会 「国営昭和記念公園」を歩く

去る11月19日、元気はつらつの会員・家族、総勢26名の参加を得て、立川市に位置する昭和記念公園において、恒例のアイアンクラブ自然観察会が行われ、好天の中、秋の自然を満喫、盛会裏に無事終了する事ができた。

直前数日間、天のイタズラか19日の天気予報のみに「雨マーク」が出現、幹事連は翻弄されたが、前夜に雨雲は太平洋に去り、当日は晴天の下気温21度という、この季節としてはこの上ない麗らかな日和を迎えた。

この公園の魅力は、先ずはその敷地面積50万坪という広大さにあり、意欲的にデザインされた、四季



折々の自然を引き立たせる野草や植栽群が全域に溢れ、水鳥の池や湿地帯を含む自由で快い地形を存分に、何万歩でも歩き回ることができる。その全身で感じ取る開放感、清涼感たるや、実に「深呼吸」を我が物にした爽快感を覚える。

公園の創園の沿革に触れると、昭和天皇在位五十周年記念事業として1983年に開園した。前身はと云えば、旧陸軍立川飛行場が米空軍基地として接収され、返還後の跡地が国営公園となる。周辺地域の防災基地としても機能しており、公園の成熟しつつある姿を見ると、計画推進を断行した英知に感服する。その広大さ故に、入園して隅々まで歩くことなど不可能であり、自らのエネルギーと相談しつつ、季節が提供する「堪能ポイント」を楽しむこととなる。秋、十一月、今回は「銀杏並木の黄葉」と、公園の北の奥に造られた「日本庭園の秋色」に狙いを絞り歩く事とした。

立川ゲートより入った直ぐ目の前から、ヨーロッパ風の見事な彩の石畳の中央をカナル（運河）が走り、所々に噴水が零れ、その200メートルの最終地点に、大噴水に囲まれたブロンズの乙女像の彫刻群が見える。カナルの両側に平行して、美しく刈り込まれた成熟した銀杏並木が今を盛りの黄葉を見せ、続いている。久々の青空との対比も見事であった。トンネルと云うに相応しい並木道は銀杏落葉の絨毯が敷き詰められ、射し込む日影を受けて「黄」のまばゆさに溢れ、人々の笑い声とシャッター音を包む。仄かに匂う銀なんの腐臭、如何にも有機的で、決して「悪臭」などとは思えない。

この後、遠くの日本庭園を目指す。道々生い茂る大樹の迫力を感じる。取分け、「樟」の古木は、この季節になっても新葉が続々と成長し、周囲に生命力を誇示しながら「人間頑張れ」、と語りかけている様な気がする。いずれ「千年樟」を目指すのだろう、「ヒト」などとてもかなうものではない。

強行軍の苦しさを和らげるべく、変化を求めて池沿いの道を歩く。水辺の芦原と芒の場所であるが、今日は何故かきれいに刈り取られていた。対岸の芒原は大自然そのまま、週日のせいか、ボートの影も見えず、真鯉の大群は、投げられたポテトチップスのかけら目がけて一大生存競争を繰り広げる。鯉の輪ゴムのような口、口、口が重なり合い、しぶきの音が上がると、カルガモの航空隊が空中から舞い込み、落下前の餌をかすめ取って行く。

道の反対側、枯れ落葉の中の灌木に目をやる。池面のけん騒とは裏腹に、ひっそりと咲くつつじの帰



り花や、名残りのホトトギスの花を見つけ、風情満点であった。思わぬ処に思わぬ草木がひそむ、それを見つける楽しみも野歩きである。

東屋のもと、楓群が枝を差し掛ける湿地帯があった。このイロハモミジは紅葉の観点からは「奥手」であり、未だ緑葉さえ多く残している。玉川上水方向から公園の西側を南下した後、東に横切る残堀(ざんぼり)川はいまは降雨時を除き水流のない川であるが、その川に架かる「さつき橋」を渡ると、眼前に、その中心の一本の大樫が目立つ巨大な原っぱが現れる。この草原を左に身ながら日本庭園へ向かう。道々、青天に大きな緑の実を突き出して輝かせる、カリンの高木、黄葉した大葉の影に真っ赤な実の房が隠れる飯桐など珍しい樹々に遭遇する。また、至るところに山茶花の赤が盛りを迎え、樹下に花弁が散り敷く。そんな初冬の醸し出す風情を眺めながら、苦も無く日本庭園に到着した。

日本庭園では、きはだ茸の正門をくぐり、「もみぢが違う」と思わせる程鮮やかな楓の紅葉を愛でることとなる。この庭園は、公園の他の部分からは隔てられ、伝統的な純日本式造園技術の粋を凝らしている。数寄屋造りの二亭の建物が格好の休憩所となり、疲れ果てた足を休めながら、大きな池を中心とした回遊式庭園の風光を戸外に眺望する。溪流や、樹林の高みより流れ落ちる小滝、わたり石の配置も心憎い。池の中心を橋が渡り、小島の松の緑が紅葉を引

き立て、架けられたばかりの真新しい雪吊りの縄が季節感をアピールする。

竹林に沿って、全国唯一と云われる「国営盆栽苑」があり、数十点の展示を堪能した。真っ赤に季節を表す紅葉の盆栽も見事である。幹が裂け、如何にも尻の筋肉が落ちた体の五葉松の前で足が止まる。「樹齢八十年」、身につまされる。しかし、深緑の迫力が迫る。

帰りは、比較的近場の西立川口へ。水辺のポート



小屋を囲み、数本の、太古の木と云われるメタセコイアの高木を見上げると、葉は未だ浅緑色、あの観る者を圧倒する赤茶色の紅葉は十二月になるのだろうか。この公園は他にも、昭和天皇の事跡を展示す

る記念館、四季折々の花園、春の桜の巨木林等々、季節によって楽しむ対象に事かかない。

今回は約八千歩を歩いた。西立川駅より青梅線で一駅、一人の落伍者もなく、元気で立川に戻る。打ち上げ昼食会は駅近かのレストラン「鮭松」で杯を傾け、程よい疲労感の中、楽しい懇親の後解散した。

(安藤 晃二・記)

